
AC196年12月27日その後

ポテチツツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AC196年12月27日その後

【Nコード】

N7685V

【作者名】

ポテチッ

【あらすじ】

マリーメイア軍との戦いは終わった……。日常という物へ帰っていく面々……。といった二次創作の小説です。初めて作る物語なので「うわぁ〜こいつ文章下手」や「何が言いたいのかわからない」など多数酷いところもあると思いますが、コメントや感想、アドバイスなど受け付けているのでドシドシ意見を送ってください。

あらすじってこんなものでいいのかな？この小説はピックアップでも投稿しています。

更新はたぶん不定期です。プラス受験生なのでかなり遅くなります

ワルツは終わった（前書き）

前置き・・・何を書いたらいいのか分からない・・・。
意見お待ちしています！！

いほどだ。

突然、光が弾けだした。フラッシュバックのような衝撃の波が一瞬で全身を駆け抜けた。

痺れに似た痛さで全身の筋肉や骨、血管などが悲鳴を挙げそうになった。途中で俺は意識がなくなっていくのが分かった。

その後最初に感じたのは空気がさつきまでと変わったことだ。変わったといっても実際にはさほど大差はない。

大差はないがどこか懐かしいと思わせるような空気に変わった。

視界が急に明るくなったと思った。目を開けてみれば、どこかで見たようなコロニーだった。

この人工草のにおい、天井を見れば鏡の様に反映しているビル群。

不意に背後に、人の気配を感じた。振りかってみると、そこには、自分の目を疑うような奴がたっていた。

白い服に、白い帽子、そして連れている子犬。

そんな……まさか……これは夢か？

「おっ……おまえ……は……」

その瞬間にヒイロの頭の中に記憶がよぎった。そうだここは

「あの」コロニーだ。このコロニーは2年ぐらい前にドクターJから受けた

連合軍兵士訓練場爆破任務を実行した場所だ・・・。

そして任務は成功したものの、一般市民まで巻き込んだ。

この目の前の少女を含めて――。

少女はゆつくりと口を開いた。前と変わらない声で――。

「おにいちゃん、元気だった？」

// // // // // // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // // // // // //

ブリュッセル大統領府は、少しずつ機能を修復していった。

瓦礫の除去。通信機器の回復。幸い怪我人は出なかったものの、このシェルターは、ことごとく破壊された。

リリーナはまだ司令室にいた。銃弾による重症を負ったマリメアのことが心配だが、レディ・アンがついているので大丈夫だろう。

それ以上に、この安堵漂うように寝ている彼の傍にいたかった。

全身傷だらけの彼——ヒイロはいまだに目を覚まさない。

司令室の入り口から誰か数人駆けてきた。

「ヒイロ！リリーナさんっ」

振り返ってみればデュオ、トロワ、カトルの3人が入ってきた。

3人共、走ってきたようで息を切らしている。

「あなたたち……良かった無事なのね？」

カトルが頷いた。

「ええ、リリーナさんもお無事で何よりです。色々大変でつらいこともありましたけど、本当に無事で良かったです。」

カトルはこれ以上ないといった笑顔を見せた。

「それにしても、こいつが笑みを浮かべてるなんて……。最初に出会ったときには想像できなかったな。」

「ああ、よくぞあの爆発でこれだけの傷で済むとは——たいした男だ。」

デュオとトロワがヒイロを見てそういった。

彼は、包帯など大まかな治療をされていた。おそらくリリーナがほ

どっしたのだろう。

「こいつがこんなに無防備で寝ている姿を見ちまうと、本当にこれ
たんだな・・・。」

「平和が、さ。」

呟いたデュオは少し照れ笑いをしているように見えた。

「そう、平和というのは自分自身で掴み取るもの。誰かから与えられるものでは決して、
本当の平和といいません。それを教えてくれたのは、ヒイロなので
すから。」

四人は安心した表情で互いに微笑んだ。

[illegible]

「おにいちゃん、あの後何してたの？」

少女は聞いた。無理もない。あの時からの時間は止まったままなのだろうから。

「俺は……ただ戦っていただけだ……。」と、ヒイロはぼそつと呟いた。

少女は最初は意味が分からないという顔をしていた。が、

おそらく別の意味で解釈したのだろう「そうなんだ」と言葉を返した。

メリーがはしゃいでいる。やたらとヒロにすがりつくようにじやれている。

ヒロはメリーをずっとなでている。なでるしか謝罪の意を示すことができない。

少女はそんな彼を悲しい目で見つめていた。

——— どれほどの時が流れたのか。メリーは、はしゃぎ疲れたのだろう、

ヒロの腕の中でぐっすりと眠っている。

重い唇を開け、ヒロが少女に言った。

「悪かった……。俺のミスでお前やメリー、それに他の人たちまで殺してしまった。

本当にすまないと思っている。」

ヒロが少女のほうを見ようとすると、少女は立ち上がり、

「いいの。もうそんなことは。だっておにいちゃん、そのときのことずっと後悔していたんでしょ？ だったら、ホントにもういいの。」

少女は満面の笑みを含んでそういった。

「それに、私、あ後はパパとママとメリーとずっと一緒だったの。」

そして、付近にあった小さな花を摘んだ。

「だから、全然悲しいとか淋しいなんて思わなかったよ。はい、これおにいちゃんにあげる。」

そう言うと、花をヒイロに差し出す。ためらいながらも、ヒイロはそれを受け取る。

それが嬉しかったのか少女は微笑む。

つづく

ワルツは終わった（後書き）

見やすいように少し修正しました。

目覚めない堕天使（前書き）

あー。サブタイトルって考えるの大変だww
最近、全然書いてないです。

もし、楽しみにしておられる方がいましたら
先に謝っておきます、すいません。

修正しました。ACE↓AED

て・・・」

リリーナはさっき情報整理の手伝いをしていたカトルから聞いたのだ。

「僕も、びつくりしたんだ。ありがとうドロシー」

ドロシーは少し照れたような顔で

「別に私は大したことをしておりません。ただ、自分で考え、出した答えがこうすることにあっただからです」とキツパリと言った。

一年前と比べ、随分丸くなったと、誰もが思うだろう。いや、この態度こそが彼女の本来の姿なのだろう。

「それより、ヒロ・ユイは大丈夫なのですか？こちら（地上）から見ていましたが、かなりの爆発

で・・・いくら彼でもあの爆発で平気なわけありませんし・・・」

「ああ、大丈夫なんだけど彼、なかなか目覚めないんだ」

カトルがヒロのほうを見ると、デュオとトロワそれにサリイが彼の周りに集まっている。

何かあったのかと思い、近づいていくと急にサリイが立ち上がり、

「ちょっと、ここ（大統領府）の医務室から器具を取ってくるわ」と、言って走っていった。

「ねえ、どうしたの！？ヒイロに何かあったのかい？？」

デュオとトロワは苦虫を嚙んでしまったような顔でカトルを見る。この様子は只事ではない、トロワが口を開いた。

「あ・・・あ、実は・・・」

[illegible]

少し前にさかのぼる

ヒイロが息をしていないことに気がついたトロワは、急いでサリイを呼びだしに行った。

デュオはヒロの脈を確かめた。

トクウン・・・トウクン・・・と規則正しく打っている。

だが、いずれ酸素不足で死んでしまう。ヒイロなら仮死状態でもなんとかなると思うのだが、

今ヒイロは無意識のままに眠っているのだ。まさかと思うが・・・という疑心感があるという

意味ではかなり危険な状態に陥る可能性がある。

「ヒイロ！起きて！！」

カトルとリリーナも駆け寄り、ヒイロを揺さぶる。

それでもやはり目を覚まさない。それと心なしが先程から彼の体温が熱くなっている気がする。

「おまたせ！急いで診るわ！！」

サリイが医療器具を持って戻ってきた。慣れた手つきで、ヒイロの体温や、心臓の動き体内の血液の流れなどすばやい動きで調べていく。

「？・・・おかしいわね。どこにも異常はないのに40度もの高熱が――なぜ？」

もちろん、爆発での怪我を除いた場合だ。確かに異常はないはずなのに40度を超える熱が出るのだらう？

「・・・問題があるのは、ヒイロ自身の精神的何か・・・かもしれないわね」とお手上げだというサリイ

「ヒイロ自身・・・」

「オレたちじゃ解決できないんじゃないか！？」

「そんな・・・ヒイロ・・・」

サリイは立ち上がり、ヒロを抱え

「とにかく、ヒロの状態をなんとかしなきゃ、このままだと呼吸困難で本当に死んでしまうわ!!」

そんな時、レディ・アンが司令室に戻ってきた。

「マリーメイア様は重傷だがなんとか一命をとりとめた」

「そうですか、良かった」

リリーナはほっと息をついた。

レディ・アンは周りの様子がただならぬ動揺に気づき、キヨロキヨロと周囲を見る。

「なんだ・・・？ヒロ・ユイに何かあったのか!？」

// // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // //

「それでね、メリーったらそこでひっくり返っちゃったの」

少女がヒロに話してくる。そしてメリーに向き直り、

「そうでしょ？ね、メリー？」

しかし、メリーは「そんなことない」といった顔をしている。

「もう！こんな時だけ、おりこうさんになって！！」

「メリーは、お前のことが本当に好きなんだな・・・」

「え！？」

少女は驚いた顔でヒイロを見上げる。

「お前といるのが楽しい、嬉しいといった顔をしている」

「そ、そうなの？メリー？」

「アン！！」

「アハハ、ねえおにいちゃんのおはなしも聞かせて」

「俺の？」

「うんっ」

ヒイロは少し考え込んで、少女の顔を見た。少女は何を話してくれるのだろうかとワクワクしている。

「俺は、生まれてからずっと迷子だった。だが一人の女性に出会って俺は一人ではなくなった。」

俺を笑顔で迎えてくれる人たち。最初は戸惑った。でも、そいつらのおかげで本当の俺に戻れた。迷子じゃなくなった。」

「迷子じゃなくなった？」

よく意味が分からないという風に顔をかしげた。

「俺は生きる意味を見つけたんだ・・・」

[illegible]

ヒイロ……。あなたの心は今、どこにあるのですか？

みなさん、あなたをとっても心配しています。早く・・・早くこちらに戻ってきてください。

ここは治療室。ヒイロはベッドに寝かされている。先程サリイラ医師がAEDを使い、彼の呼吸を吹き返し、今では人工呼吸器を付けられ、安定している。だが、彼の意識は戻っていない。

「よう、お嬢さん、どうだ？ヒイロの様子は……？」

デュオがカーテンの中央からぴよこつと顔を出した。

「熱は治まったみたいですが、まだ……」

「まあ、そんなに根気つめないで。っあ、そうだ。マリーメアの嬢ちゃんが

目エ覺ましたってサリィのおばさんがさっき言ってた」

リリーナは少しだけ微笑んだ。

「会いに行つてやんな。ヒイロはオレ看としてやるからさ」

「えっ、ええお願いします」

リリーナが立ち上がろうとしたとき、治療室の入り口の方から

「その必要はありません」

と、小さいながらも大人びた口調が聞こえた。

二人はすぐさまカーテンを開き、声がした入り口の方を見た。そこには車椅子に座ったマリーメイアとレディ・アンが立っていた。

？に続く

目覚めない堕天使（後書き）

次は、マリーメエアの話になりそうです。

マリーメエア可愛いよ。

ホント可愛い

あの、「ホラね？」っていったところ可愛い可愛い可愛い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7685v/>

AC196年12月27日その後

2011年11月13日10時04分発行